

既に天に属してゐる私たち

牧師 山本 護

小説家としての高見順はよく知られていますが、詩人でもあります。意図しているのかいないのか、「天」と題されたその詩には降誕の何事かが響いている気がします。

「どの辺からか天であるか／
鳶の飛んでゐるところは天であるか／
人の眼から隠れて／ここに／
静かに熟れてゆく果実がある／
おお その果実の周囲は既に天に属してゐる」。



詩を説明し過ぎると、国語の授業のようなつまらない理解に落ち着いてしまいます。ですから、「天」は一般に考えられているような崇高さにあるのではなく、台所の暗がりや置かれた林檎やキウイから滲み出ているもの、ということだけを確認して、あとは一人ひとりの感応力で味わっていただきましょうか。

羊飼いは「急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた(ルカ 2:16)」。

おそらく、「鳶が飛んでゐる辺」よりは高いところから、この地上の、粗末な、藁を敷いた寝床に降りて来た「天」。足元の、乱暴に扱おうと壊れそうな「天」の周囲は微かにぼおつと明るく、これを見つめていた羊飼いは「静かに熟れて」いきました(ルカ 2:20)。

この地で開拓伝道を始めた当初、御言葉は収穫したてのキウイのように固く、エグ味があり相当酸っぱかったと思います。食べた人たちは、よくぞまあ吐き出さずに飲み込んでくれました。羊飼いは「天」を直接見たので素早かったのかもしれませんが、八ヶ岳の山麓で「天」の御言葉が熟成し始めるには幾らか備えの時が必要でした。

台所、というよりもナメクジを見かける「おかって」の暗がりでは、飼い葉桶の乳飲み子が安らかに眠っています。それを覗き込む私たちは、いつのまにか、気がつかぬうちに、「静かに熟れて」、「おお その果実の周囲は既に天に属してゐる」。

まもなく降誕祭がやって来ます。ここで「天」の熟成が始まっているとはいえ、酸っぱさはまさったままです。その酸っぱさは個々人が醸す分かもしれません。醸し過ぎて酔っ払ってしまうのも「天」の趣の範囲でしょうから、どうか自由に、存分に。Ω